

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：41205  
研究種目：基盤研究(C)  
研究期間：2011～2014  
課題番号：23520538  
研究課題名(和文) 地域語の経済と拡張活用に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study in Econolinguistics

## 研究代表者

田中 宣広 (Tanaka, Nobuhiro)

岩手県立大学宮古短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：60289725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：当研究は、日本全国また諸外国の言語における言語の拡張活用例を整理して分析することにより、「社会言語学」の一分野「言語経済学」の方法論構築提案を目的とした。方言を文字で示した商品や、方言による誘いことばなどにより、言語自体に経済価値を認める用法で、総合的に7種類が認められた。[1]方言みやげ・グッズ、[2]方言ネーミング、[3]方言メッセージ、[4]方言パフォーマンス、[5]方言キャラクター、[6]方言看板・ポスター類、[7]方言エールである。  
現実の言語生活は共通語化にかかわらず、方言と地域の人々とのつながりは強まっていて、地域の人々の方言への強い思いのあることも理解できた。

研究成果の概要(英文)：We have understood in our dialectal expanded usages. 1 dialect souvenirs, 2 dialect naming, 3 dialect messages, 4 dialect performance, 5 dialect characters, 6 dialect posters, 7 dialect yells, in point of general view.  
Although real linguistic life is go common, people love their dialects strongly.

研究分野：社会言語学

キーワード：方言 拡張活用 言語景観 方言みやげ 方言ネーミング 方言パフォーマンス 方言ポスター 方言エール

## 1. 研究開始当初の背景

### 1.1 研究の動機

「地域語(方言)の拡張活用」とは、方言を文字で示した商品や、方言による誘いことばの掲示など『見せる』そして『見る』言語の用法である。家の中や街の景観の一部になっているので、見たことがある人も多いだろう。このように景観の構成要素となる言語を研究する分野を景観言語学と呼ぶ。方言の拡張活用の研究もその一部である。

方言の拡張活用は、家の中や街の景観以外にもあり、その一つが声のメッセージである。たとえば、1970年代に山口県の観光キャンペーンの東京のテレビCMでの「おいでませ、山口へ。」である。全国向けCMでの方言の使用は、そのときの常識を越えた手法であったが、「おいでませ山口」はそれ以来、観光をはじめ山口県の“大見出し”となった。2011(平成23)年秋季国民体育大会は「おいでませ!山口国体」と銘打たれた。

これらは、言語自体に経済価値を認める用法である。方言が書かれた商品は販売が目的であるし、「おいでませ」の例など方言による誘いのことばを使用するのは、方言は共通語よりもお客を呼ぶ効果が高いからである。

言語の機能では、方言が、本来の日常生活の話しことばの用法を超え、広告など非日常的な書きことばに使われる、拡張された使用法である。

当研究は、方言の拡張活用を、種類と用例から理解するのを動機としている。

### 1.2 言語経済学

景観言語学のなかでも、方言(言語)の拡張活用を研究する分野を「言語経済学」と呼ぶ。主に地域言語(方言)に含まれる格差に応じて値段が付く現象を分析して、言語の社会的地位の変動を読み取り、言語の社会的地位を、経済学の原理を使って説明する、従来とは異なった視点からの社会言語学的考察である。

方言学の面からは、新しい方言研究資料の収集・提供にある。従前は研究対象にされていなかった民間方言資料の収集と整理分析を研究課題として進め、そこに理論的な考究を加える新鮮かつ重要なものである。

### 1.3 研究の学術的背景

当研究代表者と連携研究者は、「言語経済学研究会」を組織し、言語の商業的利用や拡張活用について調査分析し、言語経済学の構築と理論発展を進めている。「言語経済学研究会」各会員の研究論著、たとえば、井上史雄 2009「経済財としての言語」『応用言語学研究』11:pp.95-102/2007『変わる方言 動く標準語』(筑摩書房)/2000『日本語の値段』、日高貢一郎 1996「方言の有効活用」『方言の現在』などが、当研究についてよく理解できる先駆的基本書である。また、三省堂辞書サイ

トにて、会員のうち5名により輪番(田中～井上～山下～日高～大橋の順)で2008年6月から連載公開中の『地域語の経済と社会—方言みやげ・グッズとその周辺—』は、2015年3月で324回の多くを数え、さらに今後も継続していく。これを、再編集した書籍『魅せる方言 地域語の底力』(2013年、三省堂)も刊行した。国外では、ウルリヒ・アモン 1992『言語とその地位—ドイツ語の内と外—』、フロリアン・クルマス 1994『ことばの経済学』が、方法論上の参考になる。

### 1.4 知見の方向

言語の拡張活用は、現在社会言語学の研究対象となっている、言語の他種の社会的変異と同様、地域や言語意識その他要因による用法の変異が認められるが、その実態や研究方法については未だ整理途上で、一部には資料の散逸も認められるので、急ぎ、整理と分析法を構築する。「2」の4目的、すなわち、日本及び他国における言語の拡張活用の分類～整理が最初の作業である。収集・集積されたデータをもとに、分布や価格等の地域的変異の分析、その整理システム開発を行う。最終的には全データ公開を目指して《ヴァーチャル方言博物館》を設立する。移動できて収集対象になる「方言みやげ・グッズ」については、カタログの形で公開する。

### 1.5 当研究の学術的な独創性と意義

言語の社会的地位を、値段、価値、経済の観点から扱うこと自体、独創的である。それを具現化する《ヴァーチャル方言博物館》設立は、当研究の重要な事業である。学術目的として、地域言語の経済活動を総合的に明らかにし、他分野も含めた言語研究全体、および、地域経済研究に寄与する。また、教育へ大きな貢献をする。学校の国語教育で方言を扱うときなどに、視覚資料による教育効果は、従前の文字中心の書籍による情報をはるかに上回る。

## 2. 研究の目的

当研究は、日本全国また諸外国の言語における、方言みやげ・グッズなどの言語の拡張活用例を整理して分析することにより、「社会言語学」の一分野としての「言語経済学」の方法論を構築して提案することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### 3.1 方法の概要

言語の拡張活用の現状実態を整理して示すとともに、その方法論自体を理論体系化して、「言語経済学」を構築してゆく。以下の手順により進めた。

まず、日本全国における言語の商業的利用例と、その他の拡張活用例をできる限り収集し、写真撮影して記録する。また、外国の言語

の拡張活用例についても可能な限り収集して整理する。

次に、データ分析と整理を行う。多変量解析法を適用するなど、各種統計処理を施して分析する。言語の商業的利用や拡張活用の出現を規定する、社会的・経済的要因を探る。

具体的には、下記のとおり進めた。

### 3.2 研究手順

#### (1) 写真記録

補助研究開始前に、連携研究者桜井が収集している戦前の「方言絵はがき」の記録と整理を一通り終え、桜井 2010「方言絵葉書について」に発表したほか、各々の収集資料について記録を進めている。言語の商業的利用例すべてとその他の拡張活用例について、現物が消滅しても姿が残る全面撮影方式とする。撮影はデジタルカメラで行う。フィルムカメラで撮影した写真もスキャナーで取り込んで電子データ化し、《ヴァーチャル方言博物館》への収蔵を可能にする。さらに物故者のもとにある過去の方言グッズについても情報を収集し、保管地に赴き写真撮影記録する。

日本全国（及び諸外国）にはさまざまな言語の商業的利用例やその他の拡張活用例が認められるが、多くは短命で、販路も小さく、埋もれ、滅びる運命にある。物故者の手もとのものは散逸または廃棄の可能性がある。山形県三川町に徳川コレクションが所蔵されているが、展示されているのは一部に過ぎない。

これらが消滅・散逸しないうちに記録して整理することは、言語実態資料の記録と整理同様、言語研究にとって重要な作業である。

#### (2) 現物の保存

方言みやげ・グッズについては、購入時の状態を保つよう保管し保存する。

#### (3) 分類とデータ記録

データ処理ソフトで統計処理が可能なように入力して「記録表」にする。統計処理のためアルバイターを適宜使役して入力させる。連携研究者大橋による「信州方言グッズ考現学」の「信州方言グッズ採集カード」、連携研究者井上の「方言景観の地理と経済」で考察を基本に2方向で記録～整理している。

2方向の第1は、拡張活用方法の整理で、項目は、「整理符号／商品名／種類／外形寸法／地の色／製造者／方言使用法／最初の語／所載語数または行数／所在／価格／購入日／購入場所、その他」である。第2の方向は、使用方言例の整理で、使用されているとおりに、また、言語意識の考察が可能なように、使用例の統計のとりやすいように、整理している。

## 4. 研究成果

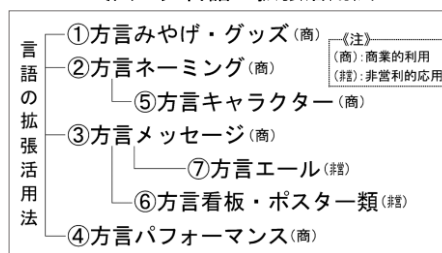
### 4.1 言語の拡張活用法の系譜

言語の拡張活用法は〔図1〕の7種類である。

①～④が基本用法で、⑤～⑦は派生用法であ

る。①～⑤は商業的利用で、⑥と⑦は非営利的用法である。7用法は基を一にし、互いに連関している（「4.3.7」参照）ので、非営利的用法も含めた7種すべてが言語経済学の研究対象である。

〔図1〕言語の拡張活用法



### 4.2 言語の拡張活用の各種類

#### (1) 方言みやげ・グッズ

方言を羅列した、はがき、のれん、湯飲み、提灯、衣類、手ぬぐい、菓子などの食品、日本酒や焼酎、ティッシュペーパーなどの日用品、その他で、主に観光地で販売されるみやげやグッズ類である。方言郵便切手も各地で発売されている。モノとして移動が可能で、一般人の収集の対象となる。このうちの「方言絵はがき」は、近代の拡張活用例でも長い歴史があり、最初例が1912（明治45）～1914（大正3）年の大阪の通天閣＋ルナパークであり、「タカイヤロー、コレガ通天閣デ三百尺オマンノヤ 自働昇降器デジツトシテ上レマツカラペン昇ツテ見メヘンカ、ソラー番高イ所デスヨツテ遠方迄見エルナンカ天王寺公園ヤ新世界ノ活動寫眞館ナドハ足許ニ見エマツセ」と大阪方言が使用された。その後も盛んに販売され、方言撲滅期のなか方言の存在の肯定を意図した動きの物的証拠であり、戦時中の戦地慰問など、方言の多様な用途の事実も示す。《ヴァーチャル方言博物館》は構築途上だが、方言絵はがきについては連携研究者桜井の収集資料を整理～公開した（「5」参照）。

#### 《方言みやげ・グッズの例》

※縮尺は考慮していない（以降同じ）



ここで気をつけることは、方言による名称のものがすべて方言ネーミングではないことである。たとえば、郷土料理や郷土菓子など、地域の伝統的食品で方言の名称のもの（岩手：キラズダンチ、沖縄：サーターアンダギー、他）である。その土地で以前から自然に方言による名称に定着している。言語（方言）の通常の用法であり、拡張活用とは異なる。

#### (2) 方言ネーミング

駅や街頭・道路に、通常は文字で掲げられ

た、方言の観光客歓迎のことばや、現地の人を対象に、より親しみをもちてもらうための“誘い文句”などである。あえて短くした例もあるが、多くは長めの(数語の連続による)語句や表現である。

《方言ネーミングの例》



(3) 方言メッセージ

駅や街頭・道路に、通常は文字で掲げられた、方言の観光客歓迎のことばや、現地の人を対象に、より親しみをもちてもらうための“誘い文句”などである。あえて短くした例もあるが、多くは長めの(数語の連続による)語句や表現である。先の「おいでませ山口」は、この一つである。

《方言メッセージの例》



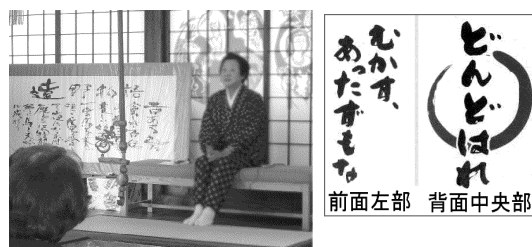
方言メッセージも、近代の拡張活用法のなかでは、方言はがきに次いで歴史のある用法である。1920(大正9)年7月の阪神急行電鉄(現在の阪急電鉄)大阪～神戸間直通運転開始のとき、関西地区の新聞に関西の方言による広告が出た(右図=部分)。「綺麗で早うて。ガラアキで眺めの素敵によい涼しい電車」(「早うて」の部分に関西の方言)である。

(4) 方言パフォーマンス

方言を、時間をかけて語り聴かせる恒常的な営業演出や放送番組、および、方言だからこそ成立する芸能の、落語や世話物歌舞伎を指す。よって、方言パフォーマンスが、方言の拡張活用7種のなかで最初の用法だと言える。パフォーマンスそのもののほか、音源CDや映像DVD、文字にして出版した書籍など、関連の「方言みやげ・グッズ」も多数ある。

ただし、映画やテレビドラマなどで登場人物の描写の正確さを求めるために用いられる方言は、通常の方言使用に近い性格だと考えるべきである。

《方言パフォーマンスの例》



(5) 方言キャラクター

各地“ご当地キャラクター”のうち、方言ネーミングによるものである。

「岩鉄拳チャグマオー」(岩手県)、「跳神ラッセイバー」(青森県)、「超神ネイガー」(秋田県)、「怪人エラシグネ」(同)、「琉神マブヤー」(沖縄県)などである。これらによる方言パフォーマンスの営業実演やテレビ番組もあるほか、これらが描かれた方言グッズも販売されていて、他の種類との関連や広がり大きな用法となっている。

《方言キャラクターの例》

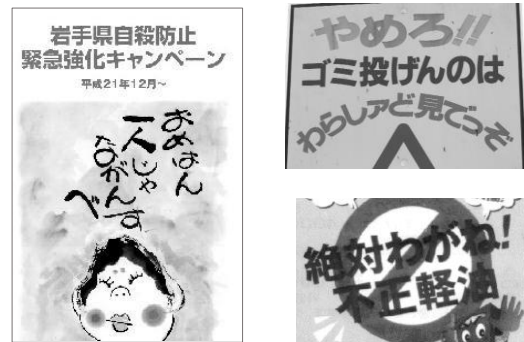


(6) 方言看板・ポスター類

方言メッセージを、非営利的な道徳啓発に応用したものである。商業的利用と軌を一にし、隠れた経済価値がある。共通語による交通安全や公衆道徳の標語など、以前から確立していた掲示方式であった。それを、方言の拡張活用法により発展させたものである。

方言メッセージの応用ではあるが、発生源は別である。最近では、パンフレット、カード、レシート裏面、路線バスの車体塗装と、多様な提示手段がみられる。

《方言看板・ポスター類の例》



(7) 方言エール

方言メッセージから、非常時などの精神鼓舞の「掛け声」に派生した用法である。具体的内容はない《非実質性》、独自の類型や特別な使用の状況などから、方言メッセージとは分けて整理される。方言エールは、東日本大震災の後から特に注目された。被災者たちは、方言をまず生存、次に長期避難生活に耐える掛け声として避難所などに掲げた。

《震災直後の方言エールの例》



### 4.3 東日本大震災後の方言エール

#### 4.3.1 方言の拡張活用の価値の高さを示した方言エール

方言の拡張活用は、以前は、各用例を余興の利用とされて言語研究の対象に認められないこともあった。震災後、方言エール例の東北地方から関東地方にわたる広域での同時多発的で多数の出現は、以前から言われていた、方言が地域の人々の精神の大きな支えとなっていたことを、私たちに再確認させた。

震災では、津波に街ごと流されてしまったふるさとだったが、2～3日経ち、被災者たちは、「自分たちが『ふるさと』を持って避難してきた」「方言は残っている」「ふるさとはなくなってしまったのではない」ということに気づいた。「方言は地域の文化」と言われるが、このとき方言は「ふるさとそのもの」の、とても重みのある存在であった。「方言」こそ「残ったただ一つのふるさと」だったのである。そういうなかで掲げられた方言エールは、「ふるさとのことば」であること自体に意義があったのである。

#### 4.3.2 続く方言エール

震災から数日ののち、「みんなでがんばっぺす」などが大小の商店に掲げられ、その後日月を経てステッカーも配られ、救助に派遣された自衛隊では、すぐに「けっぱれ！岩手」や「まげねど！女川・石巻」などを避難者たちに示すなど、被災地内外で使用された。



#### 4.3.3 方言エールの特徴

方言エールは、「4.1(7)」の災害時が初の用例ではない。昭和30年代からスポーツの応援や「ケッパレ弘高」（青森県：弘前高校）など受験の激励その他の例が見られる。「やらまいか浜松」（静岡県：浜松市、浜松商工会議所）、「きばっど宮崎」（宮崎県）など、地域ブランドの名称や振興の標語も方言エールである。震災後は広域で同時多発的に出現したので、震災後の例が特に注目された。



#### 4.3.4 方言エールの種類と例

東日本大震災での方言エールは、震災直後に手作りだった。のちに業者製品も出、Tシャツの図柄やバスの車体塗装にもなった。出現や提示方法により3種類ある。

- (ア)被災者など個人の手作り：当初多くは手書き、避難先の学校にあったマジックや模造紙または段ボールを使用、のち、パソコン作成や業者製品も出た。
- (イ)企業やマスコミ、行政など：被災地内の大型商業施設は、翌日から青空営業を始め、方言エールを掲示した。
- (ウ)外部からの救援／支援／激励：自衛隊の

災害派遣隊では、ヘルメットや車輻に方言エールを提示した。警察や一般のボランティア、激励に訪れた職業芸能人なども、現地の方言で方言エールを提示した。

#### 4.3.5 方言エールの類型と使用方言

これまでの諸例より理解するが、方言エールは、表現が、他の用法に比して顕著に類型化されている。構成は「エール部＋地名」が基本で、多くの例に感嘆符「！」が用いられているのも目立つ。地名の使用は、この用法が特に地域と一体化している証しである。

また、エール部の使用方言は、発信者が他地方の人でも、受け手の方言を使うのが基本である。ただし、発信者側の方言を使用した例（「チバリヨー」沖縄県那覇市、「がんばってや」大阪府四條畷市）もある。

この、類型などの特殊性は、方言景観について継続的に記録しているからこそ、全用法のなかで位置づけることができたものである。

#### 4.3.6 方言エールの応用

方言エールは、震災の数カ月あとから応用的利用も出た。被災地住民の精神を広く外部に伝えている。2種類あり、方言エールが、他の拡張活用法との関連が密であることを示す用例となっている。

**第1応用：**方言エールを商品に貼付したり、方言みやげ・グッズとしたりした商業的利用の応用方式である。価格を決めて販売する用例をこの分類とし、仲間内で思いを共有するために、注文製作して販売しない揃いの衣服などは、方言エールの提示方法の一つであり、応用とは異なる。



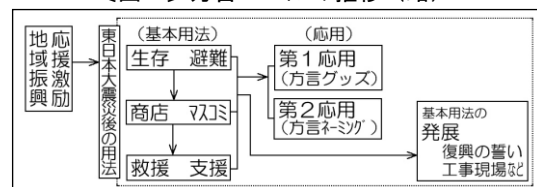
**第2応用：**震災後の復興を願う行事などの方言ネーミングに、方言エールを利用した応用方式である。



#### 4.3.7 方言エールの発展

震災から年月が経つと、「4.3.6」の応用のほか、基本用法も震災直後とは趣が異なってきた。『生存や避難生活に耐えるためのもの』から、『地区の復興を誓う』意味を込めたエールになってきている。

【図2】方言エールの推移（略）



#### 4.4 結語－拡張活用から見た方言の意義

21世紀また平成となって、現実の言語生活は共通語化により、方言と地域の人々とのつながりの弱まった感もあった。ところが、潜在的には強まっていた部分があり、方言の拡張活用は、その一つの例である。

なかでも震災後の「方言エール」は、これが一気に顕在化した用法である。他の用法も、地域の人々と方言とのつながりを示していたが、余興的に感じた研究者もあった。そのなかで方言エールは、「今日を生き抜く」→「明日も家族とともに生きる」→「ふるさとはなくなっていない」という気持ちを維持させた重要な役割を果たし、それを私たちに示した。次に何をしたいのか分からない、「(家族の行方も知れず、家も家財もなくなってしまったけれども) 気持ち【だけは】確かに持って」という互いの「掛け声」しか言えない厳しい状況のなか、方言こそ生き抜く力の源だった。

方言の拡張活用は、言語として本来と異なる用法なのに、方言の本当の底力を示した。方言の拡張活用が、決して余興的なものでなく、地域の人々の潜在的な方言への強い思いのあらわれであることが理解できる。

最近の農協での用例がこれを肯定する。JA岩手中央穀類乾燥調製施設の方言メッセージ「おらほの農業金メダル」[この地区の農作物は世界]や、JA新岩手くずまき楽農センターの方言ネーミング「よってあべ」[寄って行こう]である。農協に以前にあった地域密着の性質が薄れてきているのを、方言の「地域に目を向けさせる」機能を活用し、地域を支えている。ふるさとから生まれた方言が、ふるさとのために働いている。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

井上史雄「Google 言語地理学入門

Introduction to Google Linguistic Geography」(2011年『明海日本語』第16号 pp.43-52)

井上史雄「日本語世界進出のグーグル言語地理学－グーグルインサイトにみる外行語総合分布－」(2012年『明海日本語』第17号 pp.29-42)

[学会発表] (計4件)

田中宣広・小林隆(東北大学)・竹田晃子(国立国語研究所)・榎引祐希子(追手門学院大学)「つなぐ言葉としての方言－被災者・支援者・そして研究者－」(第30回社会言語科学会, 2012年9月1日, 東北大学)

田中宣広『方言エール』の最近の実態(『文化としての方言 絆としての方言 一東日本大震災 被災地からの発信一』仙台会場, 2013年3月9日, 仙台国際センター)

田中宣広「地域語の底力－方言エールと言語経済学の方法－」(日本方言研究会第93回

研究発表会, 2011年10月21日, 高知城ホール＝高知大学外部会場)

田中宣広「東日本大震災の復興過程にみる方言の拡張活用」(平成23年度岩手県立大学研究成果発表会, 2013年9月21日, 岩手県立大学アイーナキャンパス)

[図書] (計2件)

井上史雄『経済言語学論考 言語・方言・敬語の値打ち』(2011年, 明治書院)

井上史雄・大橋敦夫・田中宣広・日高貢一郎・山下暁美『魅せる方言－地域語の底力』(2013年, 三省堂)

[その他]

ホームページ等

田中宣広・井上史雄・日高貢一郎・山下暁美・大橋敦夫『地域語の経済と社会－方言みやげ・グッズとその周辺－』(三省堂ワード・ワイズ・ウェブ リレー連載)

《各担当 URL》

○<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/nobu-nt/> (田中)

○<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/innowayf/> (井上)

○<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/hidaka/> (日高)

○[http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/a\\_yamashita/](http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/a_yamashita/) (山下)

○<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/ohashi/> (大橋)

井上史雄・桜井 隆《ヴァーチャル方言博物館》「方言はがき」編

<http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/inoue/pcard.zip>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中宣広(岩手県立大学宮古短期大学部教授)

研究者番号: 60289725

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 (5名)

井上史雄(国立国語研究所客員教授)

研究者番号: 40011332

日高貢一郎(大分大学名誉教授)

研究者番号: 30136767

山下暁美(前・明海大学教授)

研究者番号: 10245029

大橋敦夫(上田女子短期大学教授)

研究者番号: 10249188

桜井 隆(前・明海大学教授)

研究者番号: 60255031

(以上)